

2. GISTの診断

2-2. GISTの定義

POINT

現時点でのGISTの大まかな定義としては、消化管壁に発生する間葉系腫瘍のうちKITを発現する腫瘍、言い換えるとICCsへの分化を示した腫瘍ということができる。しかし少ないながらKIT陰性のGISTも存在することから、一言ですべてのGISTを定義するのは実際は難しい。

現時点におけるGISTの大まかな定義としては、消化管壁に発生する間葉系腫瘍のうちKITを発現する腫瘍、言い換えるとICCsへの分化を示した腫瘍ということができる。しかしKITの発現が免疫組織化学的に検出できないものでも、形態学およびKIT以外の免疫組織化学上GISTと違いを見出せない腫瘍(特に免疫組織化学的にCD34が陽性となるもの)はGISTと診断すべきと考える。しかし、悪性のGISTに対してKITを標的とした治療が行われている現在、このようなGISTはKIT陰性GISTと診断・記載するのが望ましいと考える。

これは、あくまでも現時点での定義・考え方であり、さらに腫瘍の本質的な特徴を指し示すことのできるマーカーなどがみつければ、当然変化するものである。しかしKITはGISTのほぼ100%をカバーする優れたマーカーであり、これ以上に特異的なマーカーが近いうちにみつかるか否かは疑問である。

自律神経に類似した電子顕微鏡像をもつGISTをGANT(gastrointestinal autonomic nerve tumor)と呼ぶことがあるが、KITの発現や*c-kit*遺伝子突然変異の関与からみて、これらは本質的にGISTと同一のものと考えられ、現在では細分類の必要性については否定的である。しかし、ときにGIST

2. GISTの診断

としては特殊な形態や免疫組織化学像を示すことがあり，その意味では注意が必要であろう。また，GISTが消化管運動のペースメーカー細胞であるICCsに由来するという考えから，GISTをGIPACT(gastrointestinal pacemaker cell tumor)と呼ぶ提案もあるが，すでにGISTの概念は確立しており，そう変える必要性はない。

用語解説

免疫組織化学(immunohistochemistry)

細胞および組織内に存在する特定の蛋白質や多糖体などの抗原となりうる物質を，抗原抗体反応を利用して特異的にその局在を観察する方法。簡便な手技で実施でき，腫瘍細胞の分化方向や増殖能なども検討できることから，病理診断にきわめて有用である。